

前近代と近代の狭間において

聖地クラムシー

我が国のセガン研究の開拓的研究者のお一人に松矢勝宏東京学芸大学名誉教授がいる。松矢氏はセガンの『1846年著作』¹ほかの翻訳者でもあるから、松矢氏を語らずしてセガンを語る無かれ、であろう。彼はセガン生誕の地クラムシーを訪問して、その時の印象をこう綴っている²。

¹ 原題はとても長い。*Traitement moral, hygiène et éducation des idiots et des autres enfants arriérés au retardés dans développement, agités de mouvements involontaires, débiles, muets non-sourds, begues etc.* J.-B. Baillière, 1846. Paris. 同書は、イタール/セガン著、大井清吉・松矢勝宏訳『イタール・セガン教育論』[梅根悟・勝田守一監修「世界教育学選集」100]明治図書出版、1983年)に抄訳が収録されている。一般的には、略題『白痴の精神療法、衛生学ならびに教育』あるいはたんに『1846年著書』の名で語られる。本稿では『1846年著書』を採用している。

² 社会福祉法人・滝乃川学園編集・発行『矢川だより』第52号、1997年8月。

「セガン没後100年の1980年、セガンの生誕地に行きました。・・・セガンは理想の(知的障害者のためのー引用者挿入)施設をどのような情景として、頭の中に描いていたのか、私はセガンの生まれ故郷クラムシーの自然的環境ではないかと考えます。セガンの生誕地はセーヌ川の上流ヨーロッパで、周りにミネルベ運河のある緑と水豊かな地³、町の中央の象徴は、サン・マルタン寺院という、小さいが立派な教会です。こういった町の真ん中ではなく町に隣接して町を望める所に施設を建てたい、…(以下略)」

松矢氏は、セガンが望む知的障害施設をセガンの生育環境にその原点を認めている。松矢氏自身がクラムシーを訪問してこう書いているのだからその記録の持つ意味は大きいし、重い。それは、セガン自身が、著作『教育に関する報告』(1875年初版、1880年第2版)で綴っているところの、『エミール』流儀の自然的教育を「父親たち」から受けていたという<原体験>⁴をあたかも追体験したかのごと

³ 地理学的に不正確な記述であるので、修正しておきたい。「ヨーロッパ」を指しているのだろうが、間違い。ニエヴル県である。また、「ミネルベ運河」ではなく「ニヴェルネ運河」である。ついでながら、セーヌ川に合流しているヨーロッパの上流地域にセガンの生誕地クラムシーは位置している。

⁴ 原文を拙訳の上再録しておきたい。

「楽しみにもものを作るということは、ずっと昔から、家族で大きな位置を占めてきたはずである。ただ『エミール』がそれを流行にしたということだ。かの

前近代と近代の狭間であって—エドゥアール・セガンの生育史を考える

き印象を、読者に与えている。セガンの〈原体験〉はすべてのセガン研究者によってそれがあたかも史実だとして扱われてきた。もっとも、松矢氏に言わせると、中世城郭都市としての旧クラムシー域内ではなく、旧クラムシー郊外町に隣接して町を望める所こそが意味があるのであった。

しかしこの紀行文以降、我が国のセガン研究において、郊外のみ

本の影響のもとで、母親たちは、いや特に父親たちは、もし私の幼少期の記憶が正しければ、日常の教育にエミール流のやり方を持ち込み、子どもたちが楽しみにものを作るにふさわしいようにと、熱心であった。私たち、小さなブルゴーニュ(ブチ・ブルギニオン)人たちは、パパの手の動作が壁に、オオカミ、ノウサギあるいは椅子に座っている大工を表象する影絵を作ってくれた時、それを真似しようとしたものである。私たちは、パパに倣って、揺れる塔をドミノ牌で作ったり、我が兵士たちのテントをカードで張ったりしたものである。紙を簡単に折りたたんで、ひよこ、(ココ)、家、ノアの箱舟、実在しないような小型船舶の艦隊を作った。また、はさみを使って紙から、財布、はしご、壁掛け、ひだ飾り、王冠を作った。やがて、アンズやサクランボの種を加工し、ハート型、かご状のもの、数珠に形作るようになった。ドングリやマロニエで摩訶不思議な形のものを作ったものである。自然を知り尽くしているまさにその幼稚園の先生は、春には、私たちに、柳の木の幹から樹皮を剥がし、音を刻み、フルートのように奏でて、音を出す方法を示してくれた。あるいは夏には、帰り道に、高く緑に生い茂ったライ麦の茎を抜き取り、道端の頭上のサンザシを太さに応じて剥ぎ取り、まるで鳥のさえずりのようにさまざまな音曲を演奏してくれた。家に帰ると、再び、私たちに手先の使い方を示してくれようとした。それには、子どもが理解できるように、たいいていは仕掛けがしてあり、樽のたがをさらに強く締めるようにたがを弛めてあったり、できるだけ元のいい形に綴じなおすために教科書は表紙が引きはがされていたりというもので、手先の熟練の発達のために欠くことのできないものであった。しかしこれらの思い出のほとんどは、今や、実際にはなく、誇らしげに語るにしか過ぎない。だから、フレーベルが、私たちの家庭教育の一番優れた方法—ああ！もう忘れられてしまったのだが—のいくつかを、彼の幼稚園で宿らせてくれたことに感謝しなければならぬ。」

ならずクラムシーそのものをあたかも「聖地」のごとくみなす風潮を生み出しているように思う。思い起こしてみると、2003年7月27日、「清水寛先生と行く、『エミール』・セガン・21世紀平和への旅」の一行がクラムシーを訪問した時、その数ヶ月前に土地台帳の付け合わせ作業によって判明したばかりだというセガン生誕の家のドアを、「セガン先生、40年来ずっと憧れ続けてきた先生のお宅の訪問を、やっと実現することが出来ました。」と、清水寛氏がノックしたのであった。その時のことを、クラムシー市長ベルナル・バルダン氏は、「皆さんは長い間セガンの生家の前で足を止めておられ、その感動と興奮を押さえきれぬ様子だった」と綴っている⁵。清水氏のこうした情熱＝「聖地」視に応えるごとく、クラムシー市当局は、バルダン市長をして清水氏を「実質的には当市の名誉市民だ」と言わしめ、2005年3月3日、市庁舎に表敬に訪れたぼくを介して、名誉市民の証としてずっしりと重い記念の銅メダルを清水氏に授与したのである⁶。

⁵ ベルナル・バルダン「刊行に寄せて」、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』、第1巻。

⁶ くだんの銅メダルは、2005年7月2日、学習院大学文学部大会議室を会場として催された「清水寛先生の、『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』(全4巻、日本図書センター)の出版と日本社会事業史学会文献資料賞受賞とお祝いする会」において、ぼくから記念品の一品として手渡された。メダルの表面には、クラムシー市の誇る、世界的作家ロマン・ロラン像

前近代と近代の狭間においてエドゥアール・セガンの生育史を考える

なお、清水寛氏を団長とする旅の一行のクラムシー訪問は、地元紙『YONNE REPUBLICAIN』2003年8月6日（水曜日）号がその様子を報じ、「セガンをクラムシーの観光資源の一つに加えるべきである」と進言している。また、バルダン氏は、セガンの生家を「セガン博物館」として残し、誰もが訪れることが出来る記念館として改修する旨を、「刊行に寄せて」（注5の文献参照）で披露している。2012年10月27日28日に、ぼくも参加し報告したセガン生誕200周年記念国際シンポジウムがクラムシーで開かれたが、その会場でも、「セガン博物館」設置の強い熱意を示していた。

人は誰しも、その幼少体験がその人生史に強い影を残す。彼はどここの生まれで、という枕詞から語られるのも、生まれたところで幼少体験を持っているという前提からである。セガンの場合は、フランス、クラムシー生まれ（出身）と、きわめて多くの文献に書

とサン＝マルタン教会の塔が刻まれ、裏面には、クラムシー市の歴史象徴である紋章（ライオン像）と現代象徴であるオブジェとが刻み込まれている。オブジェはクラムシー市の主産業であった薪材で作る筏を手にした人物像であり、クラムシー市入り口の広場に建築されているものである。威風堂々とした様が印象深い。

ただし、同席の通訳氏が言うのには、後年、「あの銅メダルは清水先生へプレゼントされたのではなく、川口先生に、今後ともクラムシーとの濃密な交流を願いたい、という言葉添えてプレゼントされたのですよ。」ということではあったのだが。

かれているから⁷、クラムシーを語らずしてセガンの人生史論は成立しないとみなされている。だが、2012年末の、前記国際シンポジウムの前夜の準備懇談会の席で、ぼくは、地元の有力者が吐き出すようにつぶやくのを、はっきりと耳にしたのだ、「セガンは里子に出されたから」と。つまり、今のクラムシーで生きる人々にとって、国際的に著名なエドゥアール・セガンであっても、クラムシーで生まれたとしてもただそれだけの人、という評価なのだ。事実、セガンは、クラムシーを出て、それっきり帰ってきていないのである。「セガン家」そのものもセガンの父母の死とともに消失している。大体から、セガンの名を担いで騒ぐのはクラムシーとは縁のない人、クラムシーではその名さえ語り継がれてきていない。その点、セガンよりおよそ50年ほど後年の人ロマン・ロランはクラムシーで生まれ、クラムシーでコレッジを終え、それからパリに出た。しかも、ノーベル文学賞(1915年度)受賞によって世界的に名を為して後、クラムシー近くに終の住まいを構え、死してはクラムシーのサン＝マル

⁷ 例外的に、「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」(New-York Daily Tribune)紙1880年10月29日号のセガン死去を報じた記事、ならびに津曲裕次「知的障害児教育の創始者エドワード・セガンの家庭及び生地についての研究ノート」(純心福祉文化研究(6), 13-21, 2008年、長崎純心福祉文化研究会)においては、セガンの生誕の地が「オーセール」とされている。その説の根拠のほどは不明であるが、まったくの間違いである。

前近代と近代の狭間であってーエドゥアール・セガンの生育史を考える

タン教会で葬儀を挙げている。

しかし、世界的現象である、近代の現代的発展と共に地方都市の産業と文化は衰えゆくばかり。クラムシーも「どう生き延びるか」に頭を痛め続けてきた。そんなところに、象徴的に言えば、「セガンが降ってきた」というわけだ。

そんなこととはつゆ知らず、ぼくは、2005年3月3日、勢い込んで、雪の中をクラムシーに駆けつけた。前以て、秘書アニック氏に、クラムシー訪問の趣旨を伝え、協力を下さるよう、乞うてあった。おおよその内容を言えば、一つはセガン家に関する系譜、あと一つは、クラムシーにおけるセガンの学習史経験である。

系譜を尋ねたいとするわけは、セガンの父親はクラムシーの医師で名士であり、セガン家は代々が医師を務めてきた、祖父はクーランジュというところで材木商を営んでいた⁸、というのがセガン伝の定説とされてきている。だが、ぼくにはどうもよく分からないのだ。祖父が別の町で材木商、父は医学博士としての医師、そしてセガン家は代々が医師の家系、という構造を的確に図式化できる人がいたらお目にかかりたいのだが。この、なぜなぞのような研究史上の語

⁸ クラムシーより10キロほど北に上ったヨンヌ県内の小村。クーランジュ・シュール・ヨンヌ(Coulange sur Yonne)というのが制度名である。

り伝えを解くにはセガン家系図を紐解くしかないではないか⁹。

学習史については後で触れることにしよう。

市長はぼくを、2004年が創立140周年になるというクラムシー科学芸術協会(la Société Scientifique et Artistique de Clamecy)事務局長のルモアーヌ氏に紹介した。氏はちょっと寡黙な取っつきにくそうな人柄に思われたが、その実際のところは分からない。ルモアーヌ氏は、クラムシー科学芸術協会が入っているクラムシーメディア・センター(Médiathèque François-Mitterrand de Clamecy)に、ぼくを案内してくれた。「可能な限りご希望に合うよう、史料を取りそろえておきました。」

机上に、20数点ばかりの書類、その他は書籍の山という史資料に呆然とするぼくを見透かすようにーそれは善意の助言なのだがー、「クラムシーを経済的に支えた近世以降の主産業は、一つは薪材を生産しパリをほとんどの消費地として売ることでした。筏師でご存じでしょう」。そして、あと一つは政府から委託された^{ヌリシエ}里親(nouricier)の村でした。当然、政府からそのための援助金が出されています。」と言う。「ええっ？^{ヌリス}乳母(nourrice)の里ではないのですか？」「誰

⁹ 2003年6月頃、この問題で、「セガンの父親は、クーランジュの祖父の本家からクラムシーのセガン家に、日本でいう婿入りでもしたのでしょうか。」と清水氏に問いかけたことがある。そうでもしないと説明がつかないと考えたのだ。

前近代と近代の狭間にあつてーエドゥアール・セガンの生育史を考える

がそう言いましたか？乳母の里はクラムシーよりもっと奥の方に行つたモルヴァンというところですよ。良質の母乳が出るというので都会の貴族やブルジョアに人気があり、住み込み乳母（地元からすれば、「出稼ぎ乳母」として、村を出て行っています。映画にもなっています。」

2003年夏のクラムシーへの団体訪問の際に、市長および秘書からクラムシーの歴史特徴の説明を受けた際、「クラムシーは乳母の里」とガイドから通訳された。この通訳によって、清水氏を始めども、クラムシーはまさしく自然の子育てに適した環境というイメージを強くしたわけである。セガンの聖地にふさわしい。しかし、「政府委託の里親の村」となると、話は違ってくる。乳幼児期を過ぎた4歳ぐらいから、社会参加のための訓練が本格的に始まる7歳ぐらいまでを対象としたのが、政府委託の「里親」制度であった。この対象児童は、すべて親から養育放棄されたパリの子どもたち（孤児）であった¹⁰。

¹⁰ 清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』第4巻で執筆した拙稿「エドゥアール・セガン及び関連年譜統合注解（フランス時代）」では、聞き取りもせず当事資料の精査もないままの執筆であったため、「クラムシー乳母」説に拠るといふ重大な誤りを犯してしまった。2005年3月のルモアヌ氏からの聞き取りの後年の2009年、この問題を制度史料で確認した。一つはパリのAP・HP古文書館での「パリ市市民施療院、救済院ならびに在宅救護管理総評議会」（本稿では以降「救済院総評議会」と略称）の審議録であり、あと



この家屋の軒下に祈りの像が残されている。かなり古くからあることは確認した。何のための祈りの像なのだろう。祈りの像のバックを飾るのは、あたかも薪材のようなものである。この二つは近世クラムシーを象徴しているのだろうか。

「もう一つ、貴族やブルジョアたち、さらには普通の市民が、子どもを里子に出す習慣がありました。里親は代父とも代母とも言われ、あるいはたんに名付け親であることもあります。確か、セガンの父親も里子に出されているはずですよ。その里親が外科医であった

一つは同評議会への調査報告書である。調査報告書原題名は” Un de ses MEMBRES, Rapport fait au conseil général des hospices, sur l'état des hôpitaux, des hospices, et des secours à domicile, à Paris, depuis le 1er. Janvier 1804 jusqu'au 1er. Janvier 1814, De l'imprimerie de madame Huzard, Paris. 1816”

前近代と近代の狭間にあつてエドゥアール・セガンの生育史を考える

ことから、セガンの父親は医師になったのです。」と、ルモアーヌ氏が続けて言う。「そのことが分かる史料はありますか?」「セガンの父親の学位論文の写しがあります。その緒言にその旨が書かれています。」

医学博士論文の「緒言」に、クラムシーからさほど遠くは離れていないヨンヌ県オセール郡内のドリュエ・ル・ベル・フォンテーヌという小さな村の E. D. ベルトラン という外科医を、「我が縁戚、我が師、我が一番の友」と呼び、あなたのおかげで(クラムシーに入植して)医師になる決意をした」旨が綴られていた。

学位論文に書かれていた献辞を前にして、ルモアーヌ氏に問いを出した。

「ベルトランという外科医は、何か、こちらに記録がありますか?」

「ヨンヌ県内のことについてはヨンヌ県立古文書館で調べられます。ただ、セガンの父親がクラムシーにいたことから関連して調べられます。いくつか関係書類を用意してありますが、おおざっぱに言いますと、ベルトランはセガン家の名付け親をしています。名付け親は代親といいますが、里親の一つの形態です。フランスならばどこにでもあつた風習です。なぜ、どういうきっかけで里親になったか、あるいは里親として選ばれたかまでは分かりませ

ん。」

「そういう名付け親を調べるにはどのようにすればいいのですか。」

「パロアス時代には代父・代母として出生証明書に名前を連ねていますが、エドゥアール・セガンは、パロワス教会の戸籍管理時代ではなく、ナポレオン民法の時代の人ですので、出生証明書には立会人という名称で登場します。ただ、その立会人をパロワス時代と同じように代親と見ていいかどうかまでは、分かりません。」
「里子に出すとよく言われますが、代親との関係はどういうことになるのですか。」

「形式的な代親と実質的な代親とがあつた、と理解すればいいかな、と。」

「形式的なというのは出生証明書にサインするだけの人、という意味ですね。実質的な代親というのは、親に代わって保育・育児をする、育ちの過程に寄り添う、他人ではあるが、実質親である、という意味ですか。ベルトランはセガンの父親にとって実質親であつた、という理解になりますね。」

セガンの父親を例に出しての「里子」「里親」の説明を聞きながら、我日本の中近世(地域によっては近代に入ってからもしばらく)にあつ

前近代と近代の狭間にあつてーエドゥアール・セガンの生育史を考える

た「仮親」システムと同様だと思いを巡らせていたぼくは、ふと、セガンの『1846年著書』のある一節（「年齢について」の章）を頭に思い浮かべていた。

それは、「彼(普通児)の乳母の子守歌、祖母のおとぎ話、家庭教師の講義¹¹」と書かれている頁である。読み飛ばしてしまいそうな記述だったが、「何でここに『祖母』なんだ？」という読み手(私)のこだわりが生じたことがあった。翻訳書に目を通して「セガン」のイロハを学んだでいた 2003年9月頃のことである。

ルモアヌ氏の話聞きながら頭を巡らせたのはこのこと、つまりセガンの父親が里子に出されていたということの意味が何であるのかということであったが、と同時に、セガンの記述がグンと近い出来事として、感じられた。

ぼくの頭の中で、何かがガラガラと音を立てて崩れ行き、何かが静かに生まれいずるような息吹を聞く思いがした。ひょっとして、『1846年著書』における子育て過程に綴られている「祖母」というのは、セガン自身の祖母のことを言っているのではないか？そのとたん、ふと、「私(=セガン)は祖母の家に部屋を持っていて、その

後そこは父に取り上げられてしまった」という『1846年著書』の別の一節（「部屋について」の章）が頭に浮かんだ。清水寛氏はそれを「セガン自身によるクラムシーでの幼少年期の体験についての言及」であると¹²とする。果たしてそうか。

セガンは同書で、子どもの発達段階を年齢で区切り、3歳まで、7歳まで、14歳まで、18歳まで…、としている。当時のフランス社会では、3歳までが乳幼児では乳期に相当し、3歳から7歳までが幼児期で次の発達段階の準備のために身体・社会性の基礎を養う。7歳から14歳までが社会的訓練期で庶民の子どもは職人(親方)のところに弟子入りしこっぴどく鍛えられるか、やや恵まれた者が有識者のところに通って読み書き算及び実用科学の基礎を学ぶ、14歳から18歳までが職能的自立期あるいは中程度の実用学問の修得、18歳以降が社会的自立期とみなされていた。一方、貴族・ブルジョア階級では7歳以降が庶民とはまったく異なり、身分や社会的地位を象徴するヨーロッパ文明・文化の古典の基礎を学ぶためにコレージュ(寄宿学校)の「初等科」で学び、14歳以降はコレージュという名の隔離機関に「収容」される……。セガンをこの子育てプロセスにあては

¹¹ 原文は次のようである : la chanson de sa nourrice, le conte de sa grand'mère, la leçon de son précepteur

¹² 清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』第1巻。

前近代と近代の狭間であって—エドゥアール・セガンの生育史を考える

めてみれば、間違いなく、3歳までは乳母によってほ乳され、7歳までは祖母という里親によって「おとぎ話」などを通して訓話・教訓を受け、14歳までが家庭教師でコレージュで学ぶための基礎(古典学習)を学び、18歳までがオセールの名門伝統コレージュ、ジャック・アミヨ校で「学ばされた」、と断定していいはずだ。「エミール」流儀の自然主義教育を受けたなどは、入り込む余地がない、「セガンおとぎ話」なのだ。

ルモアーヌ氏にセガン家をさらに詳しく知るための史料の有無を尋ねた。机上の史資料の山の一角に積み置かれた書類の束を氏は指さす。そこには、セガンの父母の結婚証明書他の公文書のコピーが置かれていた。こういった公文書を見るのはセガンの出生証明書に次いでのことである。いわば戸籍調べが可能となる。結婚証明書から分かったこと。セガンの父親の祖父母は、いずれも、クーランジュ・シュール・ヨンヌですでに死亡していること、一方セガンの母方の祖父母は、両親結婚当時は存命中であった、ということだ。そして、母方の祖父母は、オセールが居住地である！

オセール！それでセガンは、オセールのコレージュ、ジャック・アミヨ校で学んだのか！

問題は、セガンの幼少年期に、オセールの祖母が存命であったか

どうかということだ。それを明らかにしなければ、偏狭な推論でしかない、指弾されかねない。クラムシーが『エミール』で描かれるような子どもの自然な発達を保障する環境であり、その環境に包まれ、自然の発達に沿うような愛情と方法・技術とに導かれて、セガンは育ったのだ、それがセガンの知的障害教育の思想と直結しているのだ、というクラムシー聖地説が定説化されている世界に生き続けてきた人々にとっては、ぼくのこのような推論は、真っ先に唾棄される代物でしかない。

しかし、この課題を具体的に満たす調査は、2009年まで持ち越された。その確定までは先行研究の手の平に乗っているという不安定感を抱えたままであった。

「セガンはオセールのコレージュに進んでいますね。なぜ、クラムシーのコレージュに進まなかったのでしょうか。クラムシーにはコレージュがなかったのですか？」

「クラムシーには4校、公立コレージュがありました。ですから、なぜ、オセールに進んだのか、それは謎としか言えません。」

「クラムシーの公立コレージュは旧制コレージュを基にして出来— * / たのですか？」

「そうじゃないです。ナポレオン学制改革から順次新設されてい

ますので、新制コレージュ、つまりどちらかという古典は教えられなかったようです。」

「最後にもう一つ、お訊ねします。フランス革命前から、クラムシーには書店が作られていた、という情報を目にしましたが、ルソーの『エミール』は置かれ、読まれたのでしょうか¹³」

「今と違って書店での書籍購読は、前以て予約し、入手しています。その予約者名簿も残っています。それを見る限り、クラムシー全体でも『エミール』は読まれていませんね。」

セガンの『1875年著書』に見られる幼少期の回想記(『エミール』との関係性)とそこから導かれたセガンの子育て論とを矛盾のないもの、同一論理下にあるとの研究仮説をいったん取り外し、セガンの生育過程期のフランスは近世から近代への移行期であったという視点をこそ研究の入り口で持ち得なかったことが、大きな問題であったのだ。『1846年著書』では、家族関係・子育て関係において、セガンの経験値から生み出された前近代的習俗が色濃く反映された。時代は進んで『教育に関する報告』(初版 1875年)では、時代社会

は前近代を脱し、近代を急速に進めていた。セガンは、それを的確につかみとり、自己経験の中の前近代的「習俗」に他ならない文化を『エミール』を媒介として思想的にお色直ししたにしか過ぎないのだ。セガン自身が言っているのではないか、「ずっと昔から家族で大きな位置を占めてきたはずである。」と。

『エミール』がそれを流行にした」とセガンが続けているのどう読むかということにかかわっていえば、『エミール』の出版の契機が上流社会の婦人から子育ての本を書いてほしいということにあったこと、識字の問題、経済力の問題からいっても読者層がいわゆる庶民ではなかったということを考えれば、『エミール』が流行させた社会層はまずは大都市の貴族・富豪などの上流階級であり、19世紀に入ってパリの真似をしたがる階層に広まり、19世紀半ばを超えてようやく生活にゆとりが出た上中流庶民の間で『エミール』流のやり方が広がったという史実も、無視してはならないはずである。

祖母を尋ねて

2008年10月5日、清水寛氏からファックス書簡をいただいた。それには、「セガンのご論稿の脱稿おめでとう！」と表題がつけられ

¹³ Claudin MARENCO, Le commerce de livres à Clamecy XVIIIe-XXe siècle, Bulletin de la Société Scientifique et Artistique de Clamecy, 1998. 同書によると、クラムシーの最初の書店は1770年代に開設されているとか。

前近代と近代の狭間にあつてーエドゥアール・セガンの生育史を考える

ていた。『白痴教育の普遍化を求めたエドゥアール・オネジム・セガン』とのタイトルで約 350 枚のひとまとまりのセガン研究が完成したという、ぼくの清水氏へのファックス書簡に対する返信である。それは、2003 年 5 月 16 日に受信した清水氏からのファックス書簡から始まった、ぼくの「セガン研究放浪の旅」がひとまず終着した印であるはずである。心身ともに疲弊の極地にあつたことも確かなのであつた。

そもそもの放浪の始まりは次のようなことからであつた。

「川口幸宏様。

ムジカ音楽・教育・文化研究所主催の『「エミール」・セガン・21 世紀平和への旅」に参加申込をされていますね。この旅行は『エミール』講座の修学旅行なので講座参加者を対象としていますが、それ以外の方は講師枠がありますので、是非参加してください。セガンは、フランスで生まれ、医師を務めながら「白痴」者の教育と研究を進めた先駆的な人です。共和主義者であつたが故にアメリカに亡命せざるを得ず、後の半生をアメリカで過ごしています。ヴィクトル・ユゴーとも交流があつたと言われています。

旧交をあたため、また、新しい“出会い”をいたしたく、是非、ご参加下さり、フレネ研究の成果をはじめ、いろいろとご教示、ご案内下さいますよう。 清水寛」

この最初の書簡から約 5 年半、清水氏から提示されたセガン像を、さらに詳細に、さらに別の姿で、そして定式化されていたセガン像の倒壊を、という作業を進めてきた。それというのも、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流－研究と大学教育の実践』の最終的な編集過程に清水寛氏の依頼を受けて参加することによって得た、同書に収録されたいくつかの論稿に対して持った拭えない不透明感があまりにも強すぎた故である。とりわけ、ライフ・ヒストリーを軸にしてセガンを捉え直してみると、諸々の先行研究がフィールドワーク(実証性)を決定的に欠落させて第二次史料や推測・憶測等に基づいて記述されているという方法論への批判意識を持ったのだった。開拓期(1960 年前後)のセガン研究の方法論に欠落した、ないしは未成熟であつた状態は、約 40 年後においてもそのままであつたことをはしなくも露呈したのが、清水氏によるこの編著書であつたということだ。もっとも同書は、ほとんどの論稿が、寄稿する人たちの書き下ろしではないどころか、筆者自身によって修正された痕もない既発表論文であり、それを编者清水寛氏は新たな構想の書

物であるがごとき目次で編纂しているにしかすぎない、という根本的な問題を抱えている。ぼくは清水氏に「この書は既発表のセガン研究にかかわる論稿集録ですね。」と厳しく批判をした。だから、その清水氏は、ぼくの草稿の脱稿をして、「セガンの実像・全体像に対する本格的な、第一次資料に基づく、実証的な研究は、川口さんのこのたびのご労作によって始まると確信しています。」と評するしかなかったのだろう。

ところで、J. W. トレント Jr. というアメリカの研究者は、セガンを矛盾に満ちた人だ、「女性の権利の唱道者でありながら、子息をもうけた最初の妻の名は伝えられていない。」という¹⁴。セガンが 1850 年に、アメリカに移住した時に帯同したとされる妻のことを言っているのだが、名前も分からなければ、その出自・経歴もまた分かっていない。1843 年に息子コンスタンスをもうけたとされているが、それを証明する公的書類の存在さえ確認できていない。

2003 年 10 月だったか、セガンが、医学部・医学校ではなく、パリ・法学部に在籍していたという新しい研究情報に接した—学籍等

¹⁴ J. W. トレント Jr. 著、清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀夫監訳『「精神薄弱」の誕生と変貌（上）—アメリカにおける精神薄弱の歴史』（学苑社、1997 年）、79 ページ。トレントがセガンを評して「女性の権利の唱道者」と言うが、セガン自身の分泌にそれをうかがわせるものは無い。トレントは、セガンがサン・シモン主義者であったことを敷衍して、そう言っているのだろうか。

を具体的に明かす情報は未入手の頃—こともあって、清水氏とこの問題でフランクに語り合った時、ぼくはその頃鹿島茂『職業別パリ風俗』（白水社、1999 年）を読み 19 世紀のフランス・パリの社会風俗を学ぶ一助としていたが、この書の冒頭が「グリゼット（お針子）の恋の行方」とタイトルされて、法学部の学生がお針子を籠絡して子を孕ませるなどが綴られている¹⁵。そのことに、セガンを重ね合わせることは不可能ではないと思っている、と清水氏に可能性の一つとして考えたいと提案した。さほどにセガンの日常性は不明であったのだ。清水氏が明るくこの話題を受け止められたことが印象に強く残っている。

妻の扱いもそうならば母親の扱いもそうで、セガンにはまるで母親がいなかごとくでさえある。1875 年著作『教育に関する報告』（1880 年第 2 版）の中で、「母親たち(mothers)、いや特に父親たち(fathers)」という文言で登場させるのみである。それとて複数形が使用されているから、セガンの父母に特定されるわけではない。地域性だという理解も可能だろう。伝承を綴っているとも読めるわけである。

¹⁵ 鹿島氏の本書は、『Les français peints par eux-même(フランス人の自画像)』というタイトルで出版された原書を元にして、19 世紀パリ風俗をリアルに描いたもので、非常に刺激に富んでいる。

前近代と近代の狭間においてエドゥアール・セガンの生育史を考える

要は、家族関係を黙して語らずというセガンであった。このこともあって、さまざまな憶測・伝聞が生み出され、それらが「セガン」という人物像を創りあげてきたわけである。誰も疑うことなく、従って誰も調査することなく。すなわち、「友人」ブロケット(L. P. Brockett)による次の文言で始まる弔辞は、もっともよくセガンの生育史論で使われた記述である¹⁶。

「エドワード・セガン医学博士は 1812 年 1 月 20 日にフランス、ニエヴル県のクラムシーで生まれました。彼は優秀な家系の生まれであり先祖は数世代にわたって医師として名を挙げ、その地域ではその道の最高位を占めておりました。エドワードは、オーセールの中等学校及びパリのサン・ルイ中等学校で非常に申し分のない教育を受けております。その後、名高いイタールを指導医師に持ち、続いて優秀な心理学者で精神科医であったエスキロールと関わりながら組織的な研究を行いました。・・・(後略)」

前項「聖地クラムシー」で綴ったように、クラムシー当局は、公的文書に残るセガンおよびセガンにかかわる事柄、そのコピー版を

¹⁶ In memory of Edouard Seguin, M.D., being Remarks made by some of his Friends, At the Lay Fumeral Service, held October 31 1880. Proceedings of the Association of Medical Officers of American Institution for Idiotic and Feeble-Minded Persons. 1876-1896.)

ばくに積極的に開示した。中でも、セガンの出生証明書、セガンの父母の結婚証明書は、その後の調査活動にきわめて有効に活用されることになった。出生証明書では、セガンのファーストネームがオネジム＝エドゥアールであること、母親の名前がマルグリット・ユザンヌであること、届け出住所がオ・バー・プティ・マルシェ通りであること、結婚証明書からは、さらにすばらしいこと、つまりセガンの父方母方の祖父母名、居住地、生没までが判明したのである¹⁷。

父方祖父 フランソワ・セガン 共和歴 6 年 2 月 23 日 死去

祖母 マリ・テレーズ・ギマール 共和歴 9 年 10 月 19 日 死去

居住地はともにクーランジュ・シュール・ヨンヌ

母方祖父 ジョセフ・ムーリス・ユザンヌ

祖母 マリ・アニエス・ペロニエ

居住地はともにオセール

なお、母マルグリット・ユザンヌの生誕住所はオセールのデュ・ポン通りであった。番地は不明である。

これではっきりしたのは、セガンが、「祖母の家に自分の部屋を持っていた」と『1846 年著書』でいう経験は、清水氏が言うような「クラムシーでの幼少時の体験」ではあり得ないということである。だ

¹⁷ 残念なことに、証明書記載の住所に番地が書かれていない。

いたいから、清水氏はその叙述の根拠となることを触れていない。推断も甚だしいが、そうしたことは清水氏に限らずセガン研究者にはしばしば登場していることであった。いわば常態であった。そのことが後のセガン研究に大きな悪影響を与えてきているという評価は事実であって、少しも大げさな物言いではない。研究方法の誤りが歴史をも誤って捉えてしまう危険性をセガン研究者たちは、幾度も犯してきたのだ。

さて、単純な思考しかできないぼくは、セガンの生家を知った時に感じた「歴史の事実との遭遇の、ある種の興奮」をふたたび得たいものだと、ことあるごとに、訪問先を徘徊して歩いた。その端的な例が、2007年8月からの、セガンの第一の師とされるJ. M. G. イタールにかかわる公文書探しと彼の終焉の地パッシー訪問と埋葬墓



地モンパルナス墓地の訪問である。しかしながら、こうした活動に一定の終止符を打ってセガンの生育史を纏めたのが、先に

触れた2008年10月5日付け清水書簡に述べられた「脱稿」であった。この時点では、イタールとセガンとの関係性を、先行研究のように濃密なもの—ブロケットの言う指導医師—に捉えられないというぼくの内面に見切りをし、従来の説に従うことにしているのだが、いざ「脱稿」を表明してしばらくの満足感に浸るも、「何も分かってないし何も新しくないではないか」と怖じ気づく気持ちが強く沸き上がって来、「脱稿」宣言を取り消し、引き続きセガン研究を行うことになった。

続けたことは大いに正解であった。イタールの件で言えば、公文書・記録文書探しでは彼とセガンとを関連づける文書の発掘は皆無であった—ということ、セガンとイタールとの関係性はセガンの言辞のみが残っているということになる—、終焉の地パッシーの、終焉の家の特定化は今もなお不明であるが、墓地の特定化については、2009年5月27日に埋葬墓地番地が判明し¹⁸、墓参することができた。170年間眠り続けてきたイタール墓との遭遇は、セガン研究史では叙述されたことがないだけに、感激ひとしおであった¹⁹。

¹⁸ 次の通りである。Division : 3 1ère section / Ligne : 12 du rond point / N o de la tombe : 1 est

¹⁹ 本ページ左挿入写真はイタールが埋葬されているモンパルナス墓地の中央ロータリー（円形広場）。霊柩車は、幹線道路の円形広場のちょうど前の大墓地の中に進み行き、イタールは埋葬された。

この2009年という年度は、一年間のサバティカルを得たため、5月20日から6月30日までの2ヶ月余間はフランス共和国での研修を選んだ。イタール墓探しはこの研修の目的の一つであったが、イタール墓の特定の達成感は次なる課題を引き寄せることになった。「セガン家の家系、とりわけ祖父母の代までははっきりさせ、墓地の様子も知りたい。そして母親の家系も。」この作業を通じて知ろうとする目的は、「セガン家の地域における位置」である。つまり、セガン研究史が語り継いできた「代々医師の名家セガン家」の本当のことを探り当てること（実証作業）であり、併せて、語られてこなかった母系の明晰化であった。結論を言えば、「墓探し」は不能に終わったが、セガン生育史を明らかにする大きな到達を得ることになった。

2009年6月1日、ぼくと研究補助者（ボランティア）のA氏²⁰、通訳のB氏の3人が、パリ・ベルシー駅を発ち、オセールに向かった。オセール駅を降り立ってから見る城郭都市オセールの都市構造と景観は、4年半前のセガンの在学調査のための訪問時と何も変わっていなかった。

²⁰ 後に拙著『一九世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミューン』（幻戯書房、2014年）の編集を専属で担当していただくことになる。

我々は、まず母親が生まれたデュ・ポン通りを歩いた。この通りは城郭都市オセールの入り口通りとも言うべき道で、幅は広く、先細りの感は否めないが、長く続く。母が生まれた住所番地が不明なので、探すあたりは、セガンの母親の出生証明書に示されていた「商人ユザンヌ」という情報から、時代的にはブルジョア（豪商）階級であることを頼りに、古い豪華な建築物を探すことだった。

しかし、当たり前のことだが、これだけの情報では候補家屋さえ探し当てることはできなかった。オセールという街づくりの特徴、とりわけ目に付く^{Les maisons à pans de bois}様式の建築物の特徴なども含めて、何一つ知っていなかったのだから。こうしたことから、オセール散策を兼ね、まずは街のことを直感的に知ることに努めたのが、オセール入りしたその日である。小高い丘の上に築かれた中世城郭町はいくつかの教会に支配されたところであるように思われた。後日の文献調査で、いくつかの^{paroisse}パロアス(小教区)教会で構成された街だと分かった。14、15世紀には、7パロアス教会が見られる。ユザンヌ家はどのパロアス教会に属していたのだろうか。現在地図ではサン＝ピエール教会が候補に挙げられるのだが。

前近代と近代の狭間にあつてーエドゥアール・セガンの生育史を考える



写真〔左〕のロンバージュ建築は15世紀のものであり、現在もお人が生活している。もちろん歴史建築物として指定

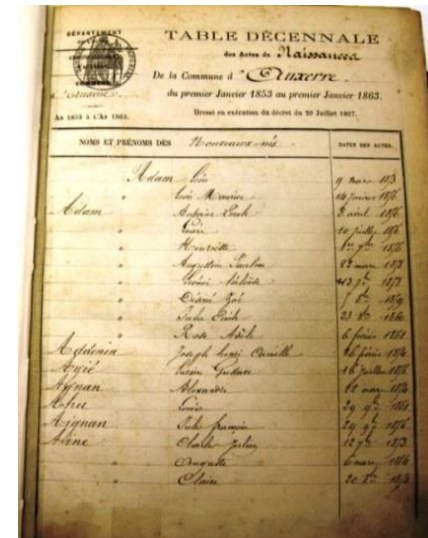
され保存に努められていることは言うまでもない。オセールにはこのような建築物が数多く見られることで知られており、観光客を呼んでもいる。しかしその一方で、これという現代的な産業を生み出せないのだろうか、街の中心部は観光客で賑わっているが、先ほどのデュ・ポン通りを挟んで外郭部分の建築物には、かなり多くの「貸し屋」「売り家」の看板が見られた。ここにも「現代化」の影が色濃く見られるのだ。

翌6月2日は起床時が雨であつた。にもかかわらず、ひよっとしたら成果が得られるかもしれないと、ある種の予感を持った。母方の家系を知り、少なくとも祖父母の没年を知るために、戸籍係、つまりオセール・コミューン古文書館を訪問した。窓口では優しいマダムが対応してくれた。

初期対応で、セガンの祖父母「ジョセフ・ムーリス・ユザンヌ」と「マリ・アニエス・ペロニエ」の没年を知りたいというぼくの調査目的に応じて、マダムは、若干ぼくに聞き込みをしたあと、その年代をフランス革命期から19世紀全般に対象化し、黒表紙で綴じられた冊子数冊を抱えてきた。

「これはオセールの、県・郡ではなく、コミューンの死亡証明書綴りの索引。県や郡のはオセール県立古文書館になります。フランス革命期と19世紀のを持ってきたから、これで人名項目を調べて下さい。これに載ってなかったらお手上げです。」

前頁右の史料が「死亡証明書綴りの索引」の1853年度から1863年度のものである。セガン家の家系調査には直接関係しない年度だ。とりあえず19世紀開始から10年度分ずつの検索を開始した。なかなか馴染むことのできないフランス綴り文字で埋まったページを繰る。A、B両氏にもお手伝いいただき、Uzanne



前近代と近代の狭間にあつてーエドゥアール・セガンの生育史を考える

の項目を検索した。最初の冊子に **Uzanne, Joseph Mourice** の名を見いだした。1807年9月10日が没年月日である。我々がセガンが誕生した時には母方祖父は亡くなっていたことがこれで判明した。

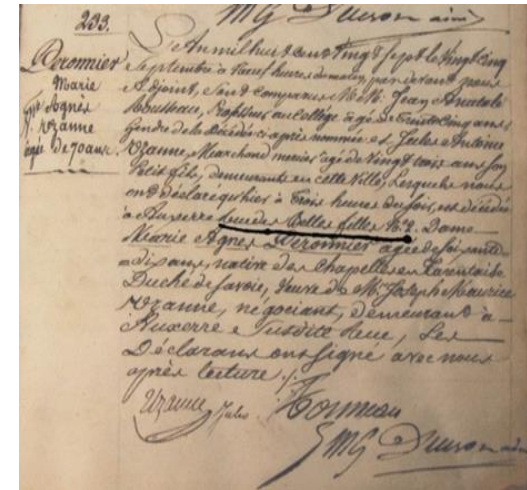
マダムは死亡年度の戸籍原簿（死亡証明書綴り）を運んできてくれた（上写真）。没年73歳。没したところが「トラヴェルジエール通り4番」と記載されているが、この通り名は新旧オセールには無い。係官のマダムに尋ねても、どこだか分からない、との返事だった。セガンの生誕地クラムシー郊外のニヴェルネ運河とヨンヌ川との合流地点にこの通り名があるが、関係性は不明である。

続いて、祖母マリ・アニエス・ペロニエ。セガンが『1846年著書』に書いている「祖母」と同一人物であるとするならば、セガンのオセール時代であり、1810年前後以降が対象と考えてよい。マダムが開示してくれた「死亡証明書綴りの索引」の1800年代、1810年代、1820年代とページを繰っていった。Uzanneの項だけを検索すればいいことが分かったから作業は比較的スムーズに進む。1820年代の索引にその名を見いだした。没年月日が1827年9月25日。セガン15歳の年であった。パリのコレージュ、サン＝ルイに学籍を置いたのが1828年のことだから、おそらく、コレージュ、ジャック・アミヨにまだ在籍していた頃であろう。間違いなく、セガン

が自室を持っていたその自室を父親に取り上げられた「祖母の家」とは、やはり、オセールのそれなのだ！

マダムがのぞき込むやいなや、「あら、亡くなったのこの近くよ。今は無い通り名で、今はポール・ベール通りと言うけれど。建物も昔のままです。」と助言をくれた。

祖母の亡くなった **rue des belles-filles, no.2**（ベル＝フィユ通り2番：前頁右の史料で太線を引いたところ）を探索するため、古文書館を後にした。もし、建物が、祖母の亡くなった頃のままであるならば、そこでセガンが自分の部屋を持っていたのであるから、セガンの時代の面影をそのまま知ることが出来るかも知れないと思うと胸が轟いた。なお、古文書館退去時に、係のマダムが、「ユザンヌ家のお墓を調べたけれどオセールには無いわね。」と教示してくれたのだった。





マダムが教えてくれた「ポール・ヴェール通り」を現行オセール市街地図で探す。我々がこの街に入ったポール・ベール橋を渡り終

えると、大きな路デュ・ポン通りが始まる。いくらか曲がりくねりはするが脇に入らずそのまま進んで行くと、枝分かれしてポール・ヴェール通りが街の中央部に進んでいく。ポール・ヴェール通りの最後の直線部（街の中心部となる）がかつてのベル＝フィユ通りである。この近在はコロンバージュ建築物の「宝庫」でもある。青線の終点地の左が2番地となる（×印がついている方）。路を抜けると広場となっており、かつてはフォンティーヌ広場と呼ばれていたように、噴水が安らぎの光景を作っている。

写真左が「祖母の家」の番地に建っている家屋である。コロンバージュ建築物であるが、比較的新しく思われた。後日に、この街の

コロンバージュ建築物の総合的な研究書²¹を入手し紐解くと、17世紀建築物だということ。もちろん外装も内装も「化粧直し」をしているからかつてのままであるはずはないが、骨格は変わっていない。間違いなく、セガンは、この家で「自分の部屋」を持っていたのである。

この戸籍調査の後で判明したことだが、ベル・フィユ通りは18世紀に商工業地域として開発された一角であった。まさに街の中心



なのだ。商人階級が行政権を握った近世期後半を想起せざるを得ない。その名残が今日も **Passage Manificier**（パッサージュ・マニファシエール：写真左）を抱え込んだ商用建物(Halle)として残っており、工芸品・衣料品の店が開かれている。かつては額縁、鏡の飾り、モスリン、ガラス製品などの製造・販売をしていたことを示す古いプレートが建

²¹ Adrien CHAIX, Les maisons à pans de bois d'Auxerre, Société des Historiques et Naturelles de l'Yonne. 2005.

物の脇にはめ込まれている。セガンの祖父は糸を扱う商人であったというから、ひょっとしたらここで布地を織り、販売もしていたのだろうか、などとも想像するのであった。

あと一つ判明したことをつけ加えておかなければならない。

戸籍係のマダムが関係する資料としてテーブルに置いた一つに、オセールの人名辞典²²がある。それによると、オセールのユザンヌ家を次のように紹介することができよう。セガンの母方曾祖父アンティヌ・ユザンヌが 18 世紀にサルジニア王国サヴォア地方から政治亡命をしたイタリア人移民家族である。母方祖父ジョゼフ・ムーリスが 1782 年にオセールに入植し、商人として一族の基盤を築いた。母親のマルグリットは 4 人きょうだいの末っ子である。また、サン＝シモン主義者で 1848 年から 49 年の 1 年間オセール市長を務めたジュール・アントワーヌ・ユザンヌ（商人で地主）は、母の長兄アントワーヌ（商人）の子ども、つまりセガンのいとこにあたり、ベル＝フィユ通り 3 番に居を構えていた。祖母の家の路を隔てた向かいにあたる。このことを知った瞬間、ぼくは、セガン生育史のジ

グソーパズルのピースを埋めるための、かなり明確な戦略構図を描くことができると確信した。つまり次のようなことである。

『1846 年著書』に綴られた子育て過程、すなわち、誕生→乳母→里親→家庭教師→コレージュというプロセスは、彼自身の経験であること、セガンは誕生とともに乳母によって授乳され、その後はオセールの祖母のところに里子に出され、ユザンヌ一族によって訓話・古典などの素養を修得させられ、学業に旅立っただ、と。それは決して特殊ではなく当時としては普通の姿であったのだが、セガンが後の時代を切り開く知性と勇気（革命的気概）を培ったかもしれないということが、セガンに特有なことなのである。

翌日、クラムシーへ向かった。今度は父系の確かな情報を得るためである。しかし、もっとも知りたかったセガン家の墓地のありかは不明なままとなった。

とはいえ、父親の誕生の地クーランジュ・ジュール・ヨンヌ訪問では、父方祖父がフランス革命直前には村の三役を務めるほどの有力者であることが、史料的に確認することができた。しかし、「医師」との直接的関係性は出てこなかった。この点で少しく推測を交えれば、セガン家の代父（里親）を務めたある外科医がいたことは明確になった。そして、セガンの父方の血縁は、その外科医ドゥニ・

²² Paul Camille DUGENNE, etc., Dictionnaire biographique généalogique et historique du département de l'Yonne Tome 5, Société Généalogique de l'Yonne, Auxerre, 2000.

前近代と近代の狭間であって—エドゥアール・セガンの生育史を考える

ウドム・ベルトランの住んだ村ヨンヌ県ドリュエ・ラ・ベル・フォンティーヌに埋葬されたのではないかと、ぼくに語る人がいた。それほどに親密な関係があったということだろう。残念なことに、ぼく自身がそのことを確認することはできなかった。

「優秀な家系の生まれであり先祖は数世代にわたって医師として名を挙げ、その地域ではその道の最高位を占めておりました。」とセガンの告別式のプロケットの弔辞に読まれたのは、存外、こんなところを源としていたのかもしれない。日本セガン研究会会報『セガン研究報』（通巻第8号、2012年）に発表した拙稿「旅路 オネジム＝エドゥアール・セガン その生誕からフランスを去るまでの光景」においては、セガン家の里親ベルトランについてまったく触れることなく、プロケット弔辞に見られる「先祖は数世代にわたって」という文言の解釈をした。しかしながら、今は、ヌヴェール（ニエヴル県の県庁所在地）の県立古文書館に保管されている医師登録者名簿に、「セガン」名の医師は、クラムシー郡の医師の間でもアンシャン・レジューム期のニヴェルネ地方の医師の間でも、その名を見せていない、ということの「発掘」結果に従って、ベルトラン医師の「里親」として果たしたセガン家に対する大きな貢献を加えて論じるべきだと、確信している。図式的に示せば、

（里親）ベルトラン外科医→（父親）ジャック・オネジム・セガン医学博士→（当人）オネジム・エドゥアール・セガン（医学博士）・（弟）ジュール・セガン医学博士→（息子）エドワード・コンスタン・セガン（医学博士）

という、「名士の家系」となる。ちなみに、無学位医師であろうと外科医は比較的裕福な状態であり、寒村の民衆の間では名士の存在であった。中世で言えば、「^村コック・ド・^番ヴィラージュ^男（coq de village）」と呼ばれる存在であった。

もう一点。セガンは「祖母の家に自室を持っていたが、父親に取り上げられた」と回想している。育ち盛りの子どもの家庭内の居室空間についての認識と実践とが綴られているわけであり、文化史論としても、たいそう面白い記述事項のはずである。

フランスのブルジョアジーは貴族階級の真似をしたがるというのは常識的に語られる。喜劇の素材にもなっていることだ。セガン家ならびにユザンヌ家は、地域のブルジョアジーであったことは疑う余地もない。居住空間に子ども部屋を準備することは十分に可能なはずである。そういう視点を用意してみると、祖母の家にセガンが自室を持っていたことは事実だと考えてよい。それを、その家の

前近代と近代の狭間であって—エドゥアール・セガンの生育史を考える

主ではない父親がセガンから取り上げたことは、何を意味しているのだろう。

母方の文化原点はサヴォア地方にある。父方の文化原点はブルゴーニュ地方にある。そういう地域的伝承の違いが表象されているのだろうか。

子ども部屋の必要不必要は、たとえばイギリスでは必要、フランスでは不必要だという文化的差異があるように、そういうような、祖母と父親との間にあった文化史的差異への視点も用意されるだろう。この点については、あらゆる回想にもあらゆる研究にも触れられていないが、ぼくはこだわり続けている。しかし、明快な論理を得るにまでは至っていない。従って活字化はできなかった。

それとも、セガンはコレージュの管理的教育—「ただただ万力によって抑圧されており、不自然で、無益」な、暗記、体罰、軍隊的規律生活等—に対して、強い反発を覚えていたはずだから（『1843年著書』ならびに『1846年著書』）、セガンがコレージュ、ジャック・アミヨの生徒でありながら、コレージュの24時間生活を嫌っていることに対する父親の譴責行為なのか、ということなども仮説として活かされてよいだろう。つまりコレージュ生活から逃れる空間として「自室」が利用された、との理解も可能なのである。コレージュ

の事実史として、自宅から通学すること、あるいは週末は自宅に帰ることなども許容されていたのである。この点については、ブロケットの弔辞で「非常に申し分のない教育を受けた」と読まれたセガンは、永遠の眠りの床で、にが笑いをしていたのではないかと、思うのである。

いずれにしても、上記の課題は、セガンの原典をていねいに読み込む必要があること、オセールにおけるユザンヌ家のさらに詳しい情報を入手する必要があることなどが求められよう。セガンを「近現代を切り開いた先駆者」という定式化された視点から読み取ることばかりをしてきたこれまでの研究に欠落していた、セガンの生育史に内在していたであろう前近代的な習俗論、父方・母方の文化的差異論などの検討は、どうしても必要であるように思われる。津曲裕次氏が「精神薄弱教育史研究の先人達が、非常な努力のもとに積み上げてきた史実をもとに、新しい歴史を書く仕事こそ、我々の責任でもあろう。」と研究課題を提示されたのは、今もなお、十分に光り輝いていると私は思う²³。しかし、これまでのセガン研究史に見られる傾向のような、あれこれの、セガンが時代を先取りした「事実」の羅列・列挙史ではない、すなわち歴史検証に

²³ 津曲裕次 『白痴の使徒』 エドワード・セガンの生涯（『奈良教育大学研究紀要 人文・社会科学』第17巻第1号、1969年2月）。

前近代と近代の狭間においてエドゥアール・セガンの生育史を考える

耐えられる歴史的な存在としての「セガン」を対象化するような研究の出現が求められると確信している。セガン賞賛のための研究ではなく。

セガンの人格像に関して、ブロケットは、弔辞の中で知人等の不利益には黙っていることはなかったが、自身のことについてはじつに穏やかな人柄であった、という。また、セガンのフランス時代にかかわる諸史料を集大成したテュエイエは、「1846年著書には、非常に激しい口調が見られ、それまでの穏やかな言い方とはまるで別人のようである。」という。ぼくはフランス語をそういったところまで読み取る能力はまるでないから、セガンの表現の形象性の追跡はできっこないけれども、セガンはなぜ「家族」を語らないのか、という疑問を持ち続けている。彼が持った「家族」については、『教育に関する報告』(1875年)に、ゆりかごを揺すり、また編み物をしている妻の様子が描かれている場面を見ることができるのが唯一だろうか。実親については、先に触れたように、どうしても実話だとは認めにくいことが綴られているし、弟や妹については語られている節がない。もちろん、彼が著した著書、論文等のすべてが発掘され、収集されているという保障は誰もしていないし、たとえ収集されているとしても、ぼくの語学力ではそれらを完読することはまったく不可能である。そういう大前提の下にあっても、ぼくは、やはりセガンの少年期から青年期にかけての人格形成過程を襲った「何か」を

仮説せざるを得ないのだ。それは、彼を縛り付けた「前近代的なもの」からの脱却、すなわち「近代的自我の形成」への苦闘の足跡が、隠されているのだろうということ。

このことは、ぼくが研究者を志した上田庄三郎研究に内在させていた問題意識と、ぴったり重なることを、「告白」しておこう。